


日本人のスピリチュアリティ

— 仏教、キリスト教、イスラームからみた日本文化 —

Japanese Spirituality: Japanese Culture Seen from Buddhism, Christianity and Islam

実松克義
SANEMATSU Katsuyoshi

 **Key words:** スピリチュアリティ、無宗教、仏教、キリスト教、イスラーム
Spirituality, Irreligious, Buddhism, Christianity, Islam

Abstract

This is a report of a symposium on Japanese spirituality held on June 14, 2014. The author of this report planned this experimental symposium, which was hosted by the Department of Intercultural Communication. The symposium invited three speakers to talk about this intriguing subject from the point of view of Buddhism, Christianity or Islam. Three students from the department also gave their opinions on the subject. Part I of this report explains why the symposium was planned and how it was prepared and conducted. Part II includes the author's summaries and comments on the research papers on the symposium subject written by the three guest speakers

1. シンポジウムについて

立教大学異文化コミュニケーション学部主催シンポジウム

「日本人のスピリチュアリティ―仏教、キリスト教、イスラームからみた日本文化―」

日 時：2014年6月14日(土) 13:30～16:45

場 所：立教大学池袋キャンパス 11号館 3F A304教室

シンポジスト：平林二郎（大正大学総合佛教研究所研究員）、加藤嘉之（東京基督教大学助教）、
小村明子（上智大学アジア文化研究所客員所員）

学生発言者：安藤愛恵、大山尚輝、テーウェンイ

開催の挨拶：師岡淳也

司 会：実松克義、川崎晶子

1. 1. シンポジウムの企画から準備まで

このシンポジウム企画の発端となったのは、筆者が毎年度担当している「宗教と社会」という講義科目である。この種の科目はどうしても一方通行的な知識学習になりがちであるが、回を重ねるうちに「宗教」という現代的なテーマをよりよく理解するには、さらに進んで学生による主体的な議論が必要ではないかと考えるようになった。当初は課外活動な内容を考えていたが、しだいに大きな企画に発展し、最終的に異文化コミュニケーション学部の学生全体に開かれた行事となった。

テーマは、日本人である学生が日常的に接していて十分に理解できる内容ということで、日本人の宗教性を取り上げたが、視点をフォーカスした方がよいと考え、仏教、キリスト教、イスラームという三つの異なった視点から日本人の宗教性を照射し、その特徴を浮かび上がらせることにした。これらのテーマを専門とする研究者三人を選び、主旨を説明しシンポジストを引き受けていただいた。そして三人を交えて検討した結果、「日本人のスピリチュアリティ―仏教、キリスト教、イスラームからみた日本文化―」というテーマでシンポジウムを行うことになった。

シンポジウムは複数の人々による議論の場である。したがってどのようなテーマであれ「共通の論点」を持つことが生産的な議論を生むためのポイントとなる。そのためシンポジストの方々と事前打ち合わせの機会を持ち、何度も発題の要旨を書き直していただいた。

シンポジウムにはまた異文化コミュニケーション学部から三人の学生が参加することになった。これらの学生発言者と四回にわたりミーティングを持ち、個別の指導を行った。発言要旨を書いてもらい、またパワーポイントを使用してリハーサルを行った。

1. 2. シンポジウムの実施

シンポジウムは2014年6月14日(土)に実施された。多数の来場者があり、出席票に記入した人の合計は116名に上った。実際には遅れて来た人もあり、来場者総数は130名に近かったと

思われる。116名の内訳は一般参加者35名、本学学生81名である。一般参加者数はほぼ予想通りであったが、高校生から60代まで幅広い年齢層であった。予想外だったのは多くの本学学生の参加である。ほとんどは異文化コミュニケーション学部一年生（CLP履修者）であった。

シンポジウムは予定通り13時30分に開始され、きわめて順調に進行し、第一部（シンポジストの発題）、第二部（前半：学生の発言、後半：質疑応答）とも滞りなく終了した。質疑応答は挙手ではなく、司会者によって選別された質問票によって行った。あくまで共通の論点に沿って議論を行うためである。ただ時間的に当初の予定をかなり上回り、最後の質疑応答が終わったのは17時30分である。これは発題、発言、あるいは質疑応答で議論が白熱したためである。このシンポジウムの様子は、記録として残すためDVDに録画された。

シンポジウム終了後、17時45分より、セントポールズ会館1Fレストランで、シンポジスト、発言学生を囲んで懇親会を行った。

1. 3. 議論の内容

シンポジウムのテーマは「日本人のスピリチュアリティ—仏教、キリスト教、イスラームからみた日本文化—」である。このテーマに関してははじめに三人のシンポジストによって発題がなされた。平林二郎氏は仏教の視点から、仏教という外来の宗教がいかにして日本文化に溶け込み大きな影響を与えることができたのかを歴史的・思想的に通観することによって、いかに日本人がオリジナルなものを造り変え、自分のものとする能力を持っているのかを検証した。加藤喜之氏はキリスト教の視座から、この一見日本に定着していないかのようにみえる西欧の宗教伝統が明治以降の日本文化また日本社会にいかにか大きな影響を与えてきたのかを身近な例を挙げて解説した。最後に小村明子氏はイスラームの観点から、日本近代におけるイスラームの歴史に焦点を当て、イスラームは日本人にとってあまりに異質なためまったく受容されなかったが、それでも過去においてイスラームを日本に適応させようとする「日本的イスラーム」の試みがあったという知られざる事実を開示した。三氏の発題はどれも刺激的な、示唆に富む内容であり、今回のシンポジウムの問題提起として十分なものであった。

学生の発言もまた興味深いものであった。安藤愛恵さんは、生活の場に密着した日本人の自然崇拝等を例に挙げながら、日本人の宗教性の中に集団主義的な傾向がみられることを述べた。大山尚輝さんはアニメやパワースポットにみられる現代日本の若者文化のスピリチュアリティがメディアの影響を大きく受けたものであり、またそれは「無宗教」という独自の宗教性を持っているのではないかと提言した。またテーウェンイさんはマレーシアと日本の宗教性を比較して、日本人の宗教性が「いただきます」「ごちそうさま」等さりげない日常の文化の中に目に見えない次元で存在することを指摘した。

以上の発題、発言に触発されて多くの質問があり、そのうちのいくつか重要な質問について質疑応答を行った。このやりとりを通して、たとえ最終的結論は出なかったにせよ、日本人のスピリチュアリティ（宗教性）、また日本文化、日本社会についての様々な側面が明らかになり、テ

マについての理解を深めることができたのではないかと思う。

1. 4. 成果

多くの本学部生の参加があったことが今回のシンポジウムの最大の収穫である。これは学部主催のシンポジウムとして、全面的に学部のサポートがあったおかげだと思われる。これによってシンポジウムはテーマについての単なる「議論の場」であるだけでなく、学生にとって貴重な「学びの場」となった。参加した学生は、シンポジストの専門的な意見だけでなく、同時に同年代の学生発言者の意見にも接することができ、様々な視点から多くのことを学べたのではないかと思う。

シンポジウムの議論を生産的なものにするために、可能な限り共通の論点を巡って発題、発言、また議論を行った。その成果はそれなりにあったと考える。質疑応答は選別された質問票によって行ったが、司会者はなるべくすべてのシンポジスト、学生発言者に共通した質問を選ぶように考慮した。多くのシンポジウムは発言者の「言いつ放し」で終わる傾向があるが、今回のシンポジウムでは多少なりとも議論を深める努力がなされたと考える。

1. 5. 反省点

以上の様に、今回のシンポジウムは一応の成功を収めたと言えるが、同時にまた反省点もいくつか存在する。シンポジスト、学生発言者の刺激的な発表のおかげでこのテーマについての重要な問題提起がなされた。だがそこで提起された問題への理解をさらに深めるための議論構成上の工夫が今一つ足りなかったのではないかと思う。具体的には、シンポジストと学生発言者の間での意見交換、また最後の質疑応答の時間で、より有意義なアクティビティが考えられると思われる。残念ながら今回は時間的制約のため、また企画者（司会者）の力量不足のため、この点でより踏み込んだ議論に導くことができなかった。将来の課題として残された反省点である。

1. 6. 将来に向けて

このシンポジウムは実験的な試みであった。教育的機能を持たせたシンポジウムはこれまであまり行われたことがないと思われる。特に学生が参加する内容は皆無と言ってよいのではないだろうか。学生のコメントを読むと学生はこのシンポジウムから多くのことを学んだようにみえる。今回の試みを改善して方法論として確立できれば、こうした形式のシンポジウム（あるいは討論会）はより一般的なアクティビティとして学部カリキュラムの一部に組み込むことも可能かもしれない。

おわりに今回のシンポジウムを実施するにあたって協力を得た多くの人々に感謝を申し上げたいと思う。はじめにシンポジストを引き受けていただいた平林二郎氏、加藤嘉之氏、小村明子氏の三氏に深くお礼を申し上げる。また三人の学生発言者、安藤愛恵さん（及び森山直江さん）、大

山尚輝さん、テーウェンイさんに感謝を申し上げる。さらにはまた、サポート学生、異文化コミュニケーション学部、教職員、メディアセンター、参加学生、また外部の参加者の方々にお礼を申し上げたい。そして最後に、シンポジストを紹介していただいた文学部の西原廉太教授、副司会を引き受けてくださった川崎晶子教授、全面的に協力してくださった池田伸子学部長、開催の挨拶をしていただいた師岡淳也学科長、またシンポジウムの準備サポートをしてくださった大須賀智子さん、中里則之さん、召田朋子さん、笠嶋英里子さんに感謝を申し上げたい。

2. シンポジスト論文の解題

6月14日シンポジウムにおける三人のシンポジストの発題はそれぞれ非常に興味深いものだったが、30分という時間的制約のため、内容が非常に圧縮されているという印象を受けた。予備知識があまりない学生にとってはかなり難しい部分があったに違いない。またシンポジストにとっても言い尽くせぬことが多かったであろう。そこでこのテーマに関して、それぞれの視点から本格的な論文を書いてもらうことになった。それが本紀要に掲載されている三つの論文である。これらの論文の中で、シンポジウムでの議論の内容はさらに深められ、より詳細で精密な分析と考察が加えられている。

以下に、本紀要に収録された三つの論文について、その内容の解題を試み、このテーマについて筆者なりの見解を述べてみたいと思う。

2. 1. 論文 1

日本人のスピリチュアリティ ― 仏教の視点から ―

平林二郎（ひらばやしじろう）

平林二郎氏の論考はこのテーマを仏教という視点から考察している。この視点が本質的な困難さを伴うのは間違いない。何故なら仏教は日本人の生活とまったく一体化し、日本文化の中にほとんど無意識のレベルで存在していると考えられるからである。多くの日本人にとって仏教は先祖代々から続いている当たり前の「現実」であり、とりたててそれが「宗教」であるとは考えられていない。つまり仏教は我々ひとりひとりの中に精神的に深く入り込み、ほとんど空気のようにして存在している「ある何か」なのである。こうした精神的伝統を研究対象として問題意識を持って概念化し、分析と考察を加えるのは至難の業であろう。こうしたことを考えると、何故平林氏の論考がいわゆる「無宗教」についての考察から始まっているのが判明する。日本人の大半は、自分は「無宗教」であると考えている。そしてこの無宗教こそが、上述した、空気のような「ある何か」の正体なのである。

「無宗教」とは何か。「宗教」というものを信じないということである。だがこれは日本人がまったく宗教的なものと無関係であるという意味ではない。実際の統計データを見ると、自らを「無

宗教」と称している日本人のほとんどが現実には何らかの宗教（宗派）に関係し、また実際はかなり頻繁に何らかの（現世的な）目的を持って神社・仏閣、あるいは聖地を訪れている。また、よりよく調べてみると、宗教に関する意識調査の結果にはかなりバラツキがあり、設問の仕方だけで大きく変わるようである。何故こうした明らかな矛盾、いい加減さが存在するのか。これらの疑問に答えて、平林氏はその理由が日本人の「宗教性」の本質が特定の「宗教」を選ばないことにあるからだと言う。つまり多くの日本人は宗教的行為を行っていてもそれが宗教的であるとは考えないのである。神道的行為であろうが、仏教的行為であろうが、あるいはキリスト教的行為であろうが、自らの行為を特別「宗教的」であるとは考えない。すべてを自然で日常的なものとして受容するのである。

また現在使われている「宗教」という表現自体、明治初期に英語の religion、ラテン語の religio 等が訳された時に充てられた「造語」である。その意味で、用語としての「宗教」にはどうしても一神教的な西洋の宗教という響きがあり、したがって日本人が慣れ親しんでいる文化伝統からは程遠いものである。

したがって「無宗教」という返答になってしまうのである。

さて平林氏の論考で注目すべき点は、日本人の宗教性を考えるに際して最も重要なのは、日本人（日本あるいは日本の風土）が外来の思想、文化、あるいは宗教を造り替えてしまう能力を持っていることだと指摘していることにある。日本人は外来の文化伝統を移植し、それを驚くべき手際よさで造り変えてしまう。日本の歴史とはそうした文化的再創造の歴史なのである。ここで氏は芥川龍之介の短編『神神の微笑』に登場する宣教師オルガンティノと老人（日本の古代神）の対話を引用する。日本での布教の成功を疑わないオルガンティノに対して、老人はこう返答する。「しかし、我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです。」ここで老人が言わんとすることは、たとえ日本人すべてがキリスト教化されようとも、そのキリスト教は元来のキリスト教とはまったく違ったものになるであろうということである。

このことは実際に日本の仏教において起きた。平林氏はその具体例として、鈴木大拙の『日本的靈性』にみられる宗教観を取り上げ、日本仏教の重要な伝統である禅と浄土系思想の歴史をたどる。大拙によれば、禅は中国で誕生したが、因果応報説に過ぎなかったという。しかし日本に伝わって大発展を遂げ、鎌倉時代初期において武士階級を中心に広まり、瞬く間に新しい日本人の生活様式となった。つまり日本的に造り替えられたのである。もう一つの仏教の日本的展開は同時代に発展した浄土系思想にみられる。この思想の発祥は紀元前二世紀頃の北西インドであるが、日本に紹介されたのは平安中期である。この思想は鎌倉初期に法然や親鸞によって驚くべき進化を遂げ、「横超（おうちょう）」¹⁾、すなわちただひたすらアミダ仏の名を唱えるだけで、その「絶対他力」によって救済されるという新しい考えが生まれた。ここでもオリジナルな思想は、極めて日本的に造り替えられたのである。

日本的スピリチュアリティの造り変える力は、仏教を超えて日本の伝統宗教である神道の領域にも浸透した。いわゆる神仏習合であるが、その極地は本地垂迹説であろう。本地垂迹説では仏

教の神々（仏）は神道の神々として現れる²⁾。日本の仏教はインドで発祥した仏教とは似ても似つかないものである。

以上の仏教の視点からの考察を踏まえて、日本人のスピリチュアリティとは何か。平林氏は、「日本人が仏教的なのではなく、「無宗教」だと言える程に〈造り変えられた〉仏教が日本的なのである」と結論している。

2. 2. 論文 2

国家・宗教・文化—キリスト教と日本の出会い—

加藤嘉之（かとうよしゆき）

加藤嘉之氏の論考はキリスト教の視点から日本人のスピリチュアリティを論じている。このテーマを取り上げるにあたって、加藤氏は他の二人とは異なり、日本人のスピリチュアリティそのものを正面から論じるのではなく、むしろキリスト教と日本との出会いに焦点を合わせて、キリスト教がいかに日本文化、日本人に影響してきたのかを検証することで、日本人のスピリチュアリティをシルエットのように浮かび上がらせている。この氏独特のアプローチはすでにシンポジウムの発表においてみられた。氏は明治期における日本文化に対するキリスト教の影響を、思想、文学、音楽等を具体例として挙げながら、当時の日本文化がいかに強くキリスト教の影響を受けているのかを語り、参加者はそうした事実を驚きとともに知ったのであった。我々は普通、現代日本の文化と社会は日本的な伝統に根ざして、それが西洋のキリスト教の強い影響の下に成立しているとは考えない。だが日本近代史を具体的に検証してみると事実はまったくその逆で、幕末、明治維新に始まる日本の近代化はまさにキリスト教の影響なしには考えることができない。それが加藤氏の基本的な見解である。

本論において、加藤氏はシンポジウムでの議論をさらに深め、日本とキリスト教の出会いと歴史的關係を論じながら、日本人のスピリチュアリティに触れるとともに、さらに論を進めて、国家と宗教の關係について論じている。

論述を始めるにあたって、加藤氏は「宗教」という概念そのものの検討を行っている。宗教（すなわち英語の religion）はキリスト教のプロテスタント的な発展の中から誕生したものであり、宗教という本質的な文化現象を扱うには用語として様々な問題を孕んでいる。そうした一連の「宗教」批判に触れた後、現代において注目を集めているより曖昧な概念である「スピリチュアリティ」に着目している。アメリカで発祥したニューエイジ運動を持ち出すまでもなく、スピリチュアリティはいまや世界的な現象であるが、とりわけそれは現代日本の精神的傾向を象徴するものである。多くの日本人は窮屈な教義と戒律を持ち、時には危険ですらある本格的な「宗教（カルトを含む）」を信じるよりは、安全でより手っ取り早く精神的充足が得られるスピリチュアルなものに引き寄せられる。現代日本において花盛りであるパワースポットは、一見神道の体裁をとっているが、その中身は神道と何の關係もなく、ただ癒しとご利益を得たいがためだけの極めて日

本的な精神文化である。

しかしこの日本的傾向は「あくまで私事的な空間で展開するものであり」、そのために権力、あるいは国家のイデオロギーに利用されやすいという弱点を持っている。加藤氏はこうした日本のスピリチュアリティがいかに宗教的イデオロギーを形成してきたのかを、キリスト教と国家神道の関係を詳細に分析し検討することで解明しようとしている。氏はその中でひとつの驚くべき事実を指摘している。それは異質であるはずのキリスト教と神道の密接な関係である。この関係はすでに江戸末期から始まっていた。江戸末期の国学者、平田篤胤は神道の教義の体系化を図ったことで知られるが、その構想のヒントは何とイエズス会のキリスト教神学にあったという。篤胤は復古神道を構築するにあたって、天之御中主神³⁾(あめのみなかぬしのかみ)を中心とする神々の一神教的な再編成を行った。篤胤がこれほどキリスト教に入れ込んだ理由は、キリスト教徒と同様に、国学者、篤胤にとって、儒教、仏教が共通の敵であったからだという。

キリスト教と神道のこの密接な関係は明治以降も存続した。明治維新に始まり、昭和に入って頂点に達する国家神道は天皇制の精神的基盤であるが、不思議なことに日本のキリスト教はその批判を表立ってすることはなかった。むしろ多くのキリスト教指導者はそれを日本の国体のあるべき姿として容認し、あるいはさらに進んで賛同したのである。つまり彼らはキリスト教徒であると同時に神道の信者でもあったことになる。発祥も教義も異なる二つの宗教的伝統の混交をシンクレティズムと言うが、この場合は通常は「神仏習合」的な融合、第三の宗教となることを意味する。神道とキリスト教の場合はそれぞれが独自性を保ちつつ賛同しあっているのも、非常に稀なおそらくは日本でしか見られない現象であろう。その定義がどうであれ、またその是非がどうであれ、日本のキリスト教は積極的に国家戦争に協力した。日本的スピリチュアリティと共鳴し、無意識のうちに国体の有機的な部分として取り込まれていったのである。

2. 3. 論文3

日本におけるイスラームの歴史からみる日本人の宗教性(スピリチュアリティ)について

小村明子(こむらあきこ)

最後の視点はイスラームである。小村明子氏はイスラームという視点から日本人のスピリチュアリティを正面から論じている。ある意味でこの視点はこれら三つの宗教の中でも最も困難なものであろう。仏教は現在では日本文化そのものであり、キリスト教も日本文化と社会に大きな影響を与えてきた。しかしイスラームは日本と何の関係があるのか。両者には何の接点もないのではないのか。当然そういう疑問が湧いて来よう。だがあるのである。本論ははじめにこうした疑問が我々の無知に過ぎないことを教えてくれる。

イスラームは西暦七世紀始めに中東のメッカで預言者ムハンマドが興した宗教である。イスラームは現在では世界第二の巨大宗教であるが、日本においては国際ニュースで取り上げられる以外はほとんど話題になることはない。また日本とイスラームの関係についてはほとんど知られて

いないと言ってもよい。小村氏の論考はまず日本のイスラームの知られざる実態を教えてくれるという点で新鮮な驚きを与えてくれる。日本とイスラームの出会いは意外に古く、すでに125年も前に本格的な邂逅をしている。明治中期の1890年、トルコの軍艦エルトゥールル号が和歌山県大島沖で難破し、日本政府はその生存者をイスタンブールまで送還する。その時同乗した新聞記者、野田正太郎が最初の日本人ムスリムとなった。戦前の日本のイスラーム理解は政治的なもので、イスラームを国家政策として利用するため研究を行った。戦後になって初めて日本人による自主的なイスラーム団体が誕生し、紆余曲折の後現在も存続している。長い間日本人ムスリムの数は限られたものであったが、1980年代のバブル期に多くの日本人女性が来日した外国人ムスリムと結婚したため増加することになった。しかしそれでも日本人ムスリムの数は現在でも一万人程度であるという。イスラームは日本においては依然として遠い宗教なのである。

最初の邂逅から長い年月が経っているのに何故イスラームは日本に根付いていないのか。小村氏によれば、その理由はいつかあるが、最も本質的な理由はイスラームという宗教が日本人の宗教観、精神性とまったく相容れないことにあるという。イスラームは一神教であり、その信徒（ムスリム）は唯一神アッラーへの絶対的「帰依」を要求される。また六信五行という厳しい戒律が存在する。ムスリムとしての義務である五行は特に重要であり、シャハーダ（信条告白）、サラ（礼拝）、ザカート（喜捨）、サウム・フィ・ラマダーン（ラマダーン月の断食）、ハッジ（聖地巡礼）をしなければならない。日本人としてこれらを実践することは苦行に等しいとも言えよう。

ではイスラームはこれまで日本に定着する気配がまったくなかったのか。そうでもないのである。小村氏は日本のイスラームの歴史を詳細に検証し、これまでほとんど知られることのなかった意外な事実を発掘する。それが日本的イスラームの試みである。これはすでに戦前においてもみられ、例えば有賀文八朗はその著の中で、唯一神「アッラー」を「天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）」であるとしている。（これは奇しくも神道の体系化において平田篤胤が考えた神と同じである。）より本格的な日本的イスラームを試みたのは1980年頃に脚光を浴びた日本イスラーム教団⁴⁾である。教団の精神的指導者であった安倍治夫はその思想を「大乘イスラーム」と名付け、イスラームの教義を日本人の実践に合うよう再解釈している。おかげで日本イスラーム教団は一時的に多くの信者を獲得し、成功を収めた。だが一般の日本人ムスリムたちからは疎まれ、やがて歴史に葬られてしまう。日本的イスラームの試みはあった。だがその結果誕生したものはもはやイスラームではなかったため、最終的には挫折したのである。

以上で明らかかなようにイスラームは永久不変の原理主義的な宗教である。翻って日本人の宗教性はどうか。何とも不思議な事実がある。一見宗教とは無関係に見える日本人だが、統計データ（『宗教年鑑』）を見る限り、日本人の宗教人口は日本の全人口を上回っているのだ。これは二つ、あるいはそれ以上の信仰を持っている人間がいることを暗示している。また日本文化を見渡してみると、日本人の宗教性の曖昧さ、いい加減さが至るところに露呈している。神道と仏教の「神仏習合」、現世利益的傾向、また最近の流行である聖地、パワースポット巡り等である。こうした傾向はまさにイスラームの宗教性の対極にあると言ってもよい。小村氏は日本人の宗教性

について以上のような考察を加えた後、イスラームとの対比をしながら、日本人の宗教性の特徴を次の四つに要約している。すなわち、1) 宗教への無自覚な関わり、2) 複数の宗教を信じる、3) 聖と俗の混在、及び4) 現世利益と癒し、である。

2. 4. おわりに

これら三人の研究者の論文を通読した後で何が言えるのか。多くのことが言えるように思うが、ここでは筆者が特に強く感じた以下の二点を述べておきたい。

第一の点は、仏教、キリスト教、イスラームという三つの外来の宗教と日本古来の宗教的伝統、すなわち（古代）神道との親和性、同調性の問題である。ここには日本人の宗教性の本質が関わっているように思う。仏教はこれら三つの中で最も柔軟な（ということは最も曖昧な）思想を持つ宗教的伝統であった。宗教というよりは哲学思想に近く、そのため容易に日本文化と融合して日本的仏教となり、また神道と習合して修験道や本地垂迹説を生み出した。仏教に比べると、キリスト教は日本文化と無条件に共鳴することはなかったが、しかし相反するものではなく、その教えはどこかで日本人の琴線に触れるものがあつた。たしかにキリスト教は三位一体⁵⁾を基盤とする原理的宗教ではあるが、同時にまた日本という「異文化」に対応できる柔軟性を持っていた。これら二つの宗教的伝統と比較すると、イスラームはまったく異質で、日本文化とはもともと親和性に乏しい伝統である。そのためイスラームは日本においてはまったく定着しなかった。その原理主義的思想と厳格な教義が日本的スピリチュアリティとはまったく相容れず、ついに精神的接点というものを見出すことができなかつたためである。

第二の点は、以上の事実から浮かび上がる日本人のスピリチュアリティ（宗教性）の本質である。日本人のスピリチュアリティの本質とは何か。曖昧模糊としていてよくわからないというのが正直なところである。それは定まった形を持たず、時代と現実の状況に応じて千変万化に変化する。そしてこの変化は多くの場合は無意識の次元で起きる。そのため日本人は自らが気付かぬうちに変化に順応し、思想信条上の過去を躊躇なく脱ぎ捨てることすらできる。それはあたかも実体を持たない精神のブラックボックスであるかのようでもある。だがこのブラックボックスは文化を壊すものではなく、絶えず変化しながらそれを存続させているものである。それは日本古来の神道でもなく、また仏教でもキリスト教でもなく、また道教、儒教等その他諸々の外来の文化伝統でもない。そのすべてである。したがってそれは「日本的」スピリチュアリティとしか言いようのないものである。こうした日本人独特の精神性、メンタリティーは、これまでも日本人論、日本文化論の中で何度となく取り上げられ、かつては「日本教」と呼ばれたこともある。

注

- 1) 段階を経ず一挙に横っ飛びをすること。親鸞の著作にみられる概念である。阿弥陀仏の本願の力によって浄土に往生することで、浄土真宗の説く「絶対他力」の教えを表したものである。

- 2) 例えば東京都文京区の根津神社（根津権現〈ねずごんげん〉）の主祭神の一人は神道の須佐之男命（すさのおのみこと）であるが、その本地仏は十一面観音菩薩である。
- 3) 『古事記』によれば、高天原に最初に出現した神である。性別のない独神（ひとりがみ）であり、キリスト教の神、イスラームのアッラーとの共通点も存在する。
- 4) 日本イスラム教団は1970年代半ばから80年代にかけて存在した特異なイスラーム団体である。教団の創設者は医者でもあった二木秀雄という人物である。その教理は「大乘イスラーム」と呼ばれる。詳細に関しては小村明子氏の研究を参照されたい。
- 5) 父なる神、神の子イエス、及び精霊が神の三つの属性であるとするものである。キリスト教の十字架、十字を切る行為はそれを象徴している。

参考文献

- イザヤ・ベンダサン（1975）『日本教について』（山本七平訳）文春文庫
山折哲雄編（2008）『日本人の宗教とは何か：その歴史と未来への展望』太陽出版
柳瀬睦男・村上陽一郎・川田勝編（1999）『シンポジウム「日常性のなかの宗教」—日本人の宗教心』南窓社